透析医のひとりごと

「現役引退にあたって」

篠田俊雄

今年の3月で河北総合病院を定年退職し，4月から現在の教育職に就いた．研修医2年目の横須賀共済病院に勤務中に，笹岡拓雄先生や宇田有希看護婦長のご指導で透析療法に興味を持つようになり，以後40年にわたり透析医を続けてきた．一方，ここ20年あまりは診療の傍ら，透析療法に携わる臨床工学技士や看護師の卒後教育にも微力ながら尽力してきた．今回，定年の節目にあたり，わが国の医療においてその役割がますます重要になってきた臨床工学技士の卒前教育に余生をささげる決心をしたわけである．

私は昭和51年に東京医科歯科大学を卒業し，すぐに当時の第2内科に入局した．腎臓のほか，肝臓，循環器，呼吸器，血液の専門領域がある所謂ナンバー内科（総合内科）であり，腎臓は武内重五郎教授，越川昭三助教授，中川成之輔講師という贅沢な指導体制であった．武内教授は常々，診療，研究，教育のバランスがとれた医師を目指せと指導された．その指導の下，教育関連病院が徐々に充実し，医局員数も急速に増加していった．個々人の個性も尊重してくださったので，医局員はそれぞれの領域で活躍することができたと感謝している．母校の腎臓内科の佐々木成教授，内田信一教授をはじめ，各領域で全国の大学に多数の教授を輩出している．

私の場合は，診療＞教育＞研究というバランスであったと自覚している．教育や研究の活動は不十分であったと反省しているが，実臨床にとても役立ったと感じている．例えば，症例報告を行うことは，患者さんの病態や治療について深く洞察して，まとめる力の育成にきわめて役立った．患者さんや家族への病状説明を要領よくわかりやすく行えるようになった．総説論文の執筆も後輩やコメディカルスタッフへの病態や治療の説明にとても役立った．

近年，総合臨床医の必要性と重要性が認識され，目指す若手医師も多い．一方，透析医といえば3Kの職種として敬遠されてきている．私は一介の透析医であるが，透析医は優れた総合臨床医の素質があるのではないかと自負している．総合内科で各領域をローテートし，研修医2年の間に複数の関連病院に派遣されるという，今日の臨床研修制度に近い研修を受けたお陰かもしれない．透析患者のさまざまな合併症への対応が自然に身についた感じがある．個人的意見であるが，初めから総合臨床医を目指す教育は難しく，なんらかの基礎を持つ医師が総合臨床医に育つのが望ましいと考える．総合臨床医を目指す若手医師に透析医への道も考慮していただきたい．

最後に患者さんやスタッフとの信頼関係について感じていることを述べたい．「築城3年，落城1日」である．こつこつと信頼関係を築いてきても，何か信頼を裏切るような事態が生じれば，良好な関係も一瞬に

して崩れるものである．診療に当たっては，常に気を緩めずに患者さんやスタッフと接することがなによりも大切である．

最後に，今日まで私を育て，また支えてくださった先輩や同僚・後輩，コメディカルスタッフの方々，患者さんたち，そして家族に感謝して筆を置きたい．

つくば国際大学医療保健学部医療技術学科（茨城県）